

発掘調査の概要

甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第157次）

甘樫丘は、飛鳥川の西岸にある標高145mほどの丘陵で、『日本書紀』には、皇極天皇3年（644）、この丘に蘇我蝦夷・入鹿親子が家を建てたことが記されています。遺跡は、丘の東南麓にある支谷のひとつに位置し、公園整備を契機として2005年度から継続的な調査を実施しています。2006年度の調査では、遺跡の中央にあった谷の東岸に築かれた7世紀前半の石垣を約15mにわたって検出し、この場所が7世紀の前半から末にかけて大規模な造成を繰り返しながら継続的に利用されていた様子が明らかになりました。今回の調査は、石垣がどのように続いていくのかを確認することと、遺跡東辺部の状況を明らかにすることを主な目的としています。

調査の結果、石垣についてはその南端を確認し、2006年度の調査と合わせて全長約34mにわたるものであることが明らかになりました。さらにこの石垣は、全体が一連のものではなく北から23mのところまで東に曲がっていたものを、南側にさらに土盛をおこない10m分の石垣を新たに加えていることがわかりました。この石垣は、7世紀の中頃には谷とともに大規模な造成によって埋め立てられており、この場所はその後平坦地として利用されます。

今回の調査ではこのほかにも、石組の溝をめぐるせた石敷きや、50点をこえる土師器・須恵器が出土した大型の土坑、須恵器の坏に蓋をかぶせて埋めた埋設遺構、石組溝、建物跡など時期の異なる多様な遺構を確認し、複雑な土地利用の様子を知ることとなりました。

（都城発掘調査部 次山 淳）



石垣の検出状況（北西から）

高松塚古墳の発掘調査（飛鳥藤原第154次）

国宝壁画の保存修理のために、2006～2007年度に石室の解体事業が実施された高松塚古墳では、壁画の修理が完了するまでの間、築造当初の形状に古墳が仮整備されます。そのための情報収集を目的とした発掘調査を昨年7月以来、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会と共同で進めてきました。1975年に建設された保存施設の撤去工事の期間をはさみながら、本年6月まで古墳南側を中心に調査を実施しました。

その結果、古墳南東側で墳丘を取り巻く浅い周溝を検出し、高松塚古墳が直径23mの円墳であることが追認できました。さらに古墳南端では、墳丘内から南へ直線的に延びる暗渠を2本検出しました。2本の暗渠は、古墳の中軸線をはさんで東西4mの対称の位置にあり、石室周囲の排水を目的に、墳丘を築く直前に計画的に配置されたものと考えられます。また、従来から高松塚古墳の南側には、古墳築造以前に小規模な谷が存在したことが推測されてきましたが、今回の調査では、深さ2.7mほどの谷を一気に埋め立て造成した後に墳丘を築いていることが判明しました。高松塚古墳の墳丘復元に必要となるデータが得られるとともに、古墳が当初から綿密な計画性に基づいて築造されていた様子が明らかになりました。

今回の調査をもって、国宝壁画恒久保存対策事業の一環として進めてきた高松塚古墳の発掘調査はすべて完了しました。現地では、これまでの発掘調査の成果に基づいて、墳丘の復元工事が急ピッチで進行しています。間もなく、仮整備によりリニューアルした高松塚古墳をご覧いただけることでしょう。

（都城発掘調査部 廣瀬 寛）



発掘調査中の高松塚古墳（南東から）